

2005年3月の北京と1928年春の北京

—— 77年間の回顧と展望

儀我 壮一郎

北京の春と北京の歴史

2005年3月14日から18日まで、訪問先の北京は、風の烈しい日もあったが、ほとんど快晴つづきであった。国際シンポジウムも、企業と四合院・高層建築などの参観も、きわめて順調に終始し、日中両国双方にとって、「天の時、地の利、人の和」が保たれ続けたと喜んでいる。

帰国後の4月に入って、中国都市部で若者中心の反日デモが広がった。5月4日の「五四運動」（1919年5月4日の抗日運動）記念日の大規模デモが懸念されていたが、当日以後、一応鎮静化した。米中間では、人民元切り上げ問題などがくすぶり続けている。

さて、ここで1928・昭和3年の春に私が在住し、今回も訪問した首都北京の歴史的位置づけについて、概観しておこう。中長期の視点が重要と考えられるからである。

「……中国の歴史は長いから、みやこも少なくない。一つの王朝にみやこは一つ、とはかぎらず、首都に相当するみやこのほかにも、副次的なみやこが造営され、陪都（ばいと）と称した。清王朝までに、伝説上の帝王、伏刀から数えて、首都と陪都、あわせて四十六あったという。清代の学者、顧炎武の説である。……全国的に支配したのではないが、小さな政権が王朝と称し、みやこをおいてもいる。

主なもの五つをえらび『歴代古都』と称したのは一九二〇年代になってのことだった。西安、洛陽、北京、南京、開封。

一九三〇年代にはいつて、杭州をくわえて『六大古都』と称された。しばらく以前、さらに安陽をくわえ、『七大古都』と呼ぶべきだと提案され、中国古都学会で認められた（1988年）（竹内実『中国 歴史の旅』朝日新聞社、1998年、5-6ページ）。

「北京 金にはじまって元、明、清、そして現在の中華人民共和国のみやこである。七百年。遠くさかのぼれば、西周のとき、燕がここに築城し、春秋戦国のときには、燕が荆にみやこをおき（いまの北京市内広安門一帯）、十六国時代には、前燕が荆にみやこをおいて、燕京と称したことがある」（同上、6ページ）。

北京の3000余年の歴史は、燕のみやこを起点とし、800余年というのは、金が中都をおいてからの歴史である。

北京、西安、洛陽、開封、安陽は、黄河沿い、南京、杭州は長江（揚子江）沿いである。

この800年ないし3000年の悠久の古都北京の建築物は、とくに21世紀に入って、急速に変貌しつつある。2008年夏の北京オリンピックが、変貌促進の画期である。北京市の人口の激増

と四合院の取り壊しを含む都市再開発を「両輪」として、変化は加速化している。2005年3月の北京訪問・滞在によって、多くの教訓を得ることができたが、帰国後4月に入ってから中国各都市での反日デモは想定外であった。以下、滞在期間中の見聞を中心に小括する。

さまざまの こと思い出す 春北京

幼き日 歩みし道に 春の風

明日吹くは 春の嵐か そよ風か

社会学研究の過去と現在

旧ソ連では、スターリン体制の下で、社会学の研究はきびしく抑圧されていた。敗戦前の日本では、『蟻の社会』という書名さえも危険視されるような政治的・社会的情勢であり、書籍・新聞・雑誌などの発禁・伏せ字が多発した。

暗い歴史を想起しながら、今回の3月14日からの国際シンポジウムにおける社会学の権威・柴田弘捷団長の多面的な活躍を見て、胸せまる思いで開会の瞬間を迎えた。

開会直後、中国側の最初の報告「現代中国における社会階層構造の変化と傾向」（李春玲）を聞き、身体が震えるほどの感銘を受けた。なぜか。第1に、現在の中国における社会学研究の環境が予想以上に整備されていることに感動したからである。第2に、研究対象選択の自由とわれわれ「外国人」に対する発表・交流の自由という2つの面で、予想以上にタブーのない報告であったからである。対象となる階層について「不透明」な部分は率直に「不透明」とされるなど、学ぶところは、きわめて大きかった。

この第1報告によって「堰が切られた」ように、続けられた中国側の各報告、日本側の各報告とも充実した高度の内容で説得力があり、それぞれに対する質問・討論が、自由闊達なしかも緊張した雰囲気で行ったことは、いうまでもない。私は、関西で創設の学会や研究所と関係が深い。比較経営学会・日本医療経済学会・交通権学会・自治体問題研究所などである。これらを含めて、現在も約20の学会・研究所に所属し、日本、ドイツ、イギリス、カナダ、シンガポール、ソ連、中国（北京、香港、瀋陽、杭州、大連、深圳）などで多くの国際シンポジウムに参加し、異った分野での多様な報告・討論に接してきたが、今回の国際シンポジウムの内容は、最高級の学問的水準であったと確信する。

また、最初の報告者李春玲社会科学研究所副研究員と日本側の最後の報告者佐島道子専修大学助教授がともに傑出した女性研究者であることから、21世紀は女性主導の時代にちがいないと、痛切に予感した。そういえば滞在したホテルも女性主導のホテルであった。

転換期 女性主導の 春が来て

北京オリンピックと中国の国旗掲揚・国歌演奏

2008年夏到北京オリンピックが開催される。2009年10月には中華人民共和国建国60周年を迎え、2010年には、上海で万国博覧会が開催される。まさに国際的に注目を集める3年間である。

北京オリンピックで、どの国が最も多くのメダル・金メダルを獲得するか。いずれにせよ、多くの中国の選手が優勝すれば、中国の国旗が掲揚され、国歌が演奏される。その国歌は「義勇軍行進曲」（田漢作詞・聶耳作曲）である。

作詞の田漢（1898—1968年）は、湖南省漢寿县出身の劇作家で、日本に留学し、東京高等師範学校を卒業した。留日中に郭沫若・郁達夫・陶晶孫たちとともに、1921年、創造社を結成したが、後に脱退。上海芸術大学演劇科を率い、南国社を創立した。日中戦争の時期には「蘆溝橋」（1937年）などの作品を発表し、抗日の演劇工作进行を指導した。文化大革命中に獄死したが、1979年に名誉回復している。田漢作詞ということで、義勇軍行進曲が国歌としてふさわしいか否かと文革期に問題視されたとも伝えられているが、結論は、現状が示すとおりである。

また、作曲の聶耳（じょうじ・ニエアル、1912—1935年）は、2003年専修大学社研訪中団が訪問した雲南省の玉溪県出身の優秀な進歩的音楽家である。1935年、音楽を学ぶために来日中に、藤沢市の鵠沼海岸で水泳中溺死した。坑夫の歌、大道の歌なども作曲した。中国映画『聶耳』のなかで、聶耳が抗日の意気を示してヴァイオリンを弾く場面は、米国映画『カサブランカ』のなかの、ナチス支配下のカサブランカで、フランス国歌を歌う場面を髣髴とさせる。いずれにせよ、作詞者・作曲者ともに日本留学の経験があり、両者とも抗日運動に加わった経緯にも注目したい。日本人がけっして忘れてはならない中国国歌の経緯であり内容である。

「義勇軍行進曲」は、日本帝国主義の中国侵略に抵抗する励ましの曲とあってよい。奴隷とならぬように中国人民に蹶起をよびかけ、「中華民族」が危機にあることを訴え、全民族が一致して抗日を目指すというのである。北京オリンピックで国歌が演奏されるたびに、多くの人々は、歌詞を思い出し、あるいは曲に合わせて歌うであろう。歴史教科書をめぐる諸論議については省略するが、中国国歌が、中華民族の団結を強調していること、毛沢東の抗日戦争中の著書『中国革命と中国共産党』の第1章が「中華民族」であることを忘れてはなるまい。「15年」戦争のなかで、1936年12月12日の西安事変（張学良・楊虎城たちが蒋介石をとらえて兵諫）を画期として第2次国共合作が実現し、同時に、今日の「中華民族」団結のあり方が定まったのである。「中華民族が列強の蹂躪に遭った時、『中華民族』は漸次、自覚されるようになった」（吳宗金編著『中国民族法概論』西村幸次郎監訳、成文堂、1998年、2—3ページ）。

長かりし 抗日の日々 忘れ得ず

北京熱烈 オリンピックに 「前進進」

日中関係の歴史的諸側面と現状

現存の日本人のなかで、中国で最も人気があるのは、田中真紀子氏、次いで平山郁夫氏であると広く言われている。1972年の日中国交正常化の日本側代表が田中角栄首相であり、元外相の田中真紀子氏が、その政治的後継者と目されているからであろう。戦後60年間の「平和日本」を力説する論者もあるが、中国を敵視した米国と日本が同調していた日々の歴史の意味を「忘却」することも許されない。また、平山郁夫氏は、敦煌を含む中国各地を歴訪して写生に努め、日中友好運動にも深くかかわっていることから、好意的に受け止められているにちがいない。

では、最も不人気の人物は誰か。石原慎太郎東京都知事が最有力候補の1人と見られる。口を開けば、中国ないし中国人を軽視・敵視する暴言をくり返し、一方では、日の丸、君が代を教師・生徒・児童に強制し、「平和憲法」の破壊を目指すなど、不人気の理由は、揃い過ぎていいる。日中両国の多くの都市の間で、すでに姉妹都市、友好都市などの形で交流が深まっているが、石原都知事が続くかぎり、「東京－北京」という首都間の友好的交流・提携の進展は、きわめて困難である。私は、日本側主催の答礼宴での挨拶のなかで、以上のような現状に触れながら、平和憲法をまもりくらしの中に生かそうとする「九条の会」が全国各地・各界で生まれ、広く発展していることを紹介し、専修大学にも力強い動きが育ちつつあると述べた。ファシズム・軍国主義の復活を許しながら、日中間の友好を目指すことは、不可能である。秦の始皇帝による徐福集団の日本への派遣、唐の時代の鑑真和尚の来日なども含む、長期にわたる正確な日中関係の歴史認識の必要性を、いま、あらためて痛感している。

私の発言の趣旨に応じてであろうか、牛鳳瑞主任が、「日本に留学した人たちのなかに、李大釗、周恩来、魯迅、郭沫若のようなすぐれた指導者がいる」と、日中交流史の積極面を述べて、今後の友好的交流の強化を訴えられたことは、うれしいかぎりであった。いま、天安門広場に大きな肖像が掲げられている孫文が、日本を革命運動の重要な拠点としていたこと、蒋介石も日本留学の経験をもつことなどを連想し、遣隋使・遣唐使を含む1000年以上にわたる日中双方の留学生の歴史的名簿の作成が必要であろうなどと考えている。孫文主導によって第1次国共合作が実現、現在は、第3次国共合作の流れが生まれつつある（池田誠・儀我壮一郎・松野昭二『中国革命史』法律文化社、1966年参照）

日中の友好的交流についての牛主任との懇談のなかで、嶋根克己団員が、「日中の関係が、ドイツとフランスの関係のように親密になれば良いと願っている」と力説されたこともきわめて印象的であった。日本は、侵略戦争に関するドイツの徹底した歴史的反省のあり方から深く学ばなければならないのである。

春風に 独仏仲良く 握手して

アジアでは 平和の風か 暗雲か

答礼宴の歓談のさいに、牛主任に、「環境改善のために、首都製鋼（首鋼）が北京西郊の石景山から河北省臨海部などに移転するのですか」と質問した。牛主任は、「その大移転は、実は20年ぐらい前から、私が提案していたのです。しかし当時はまだ若かったので、きき入れられなかったのですが、実際に移転して、生産高も大きく増え、成功です」と喜色満面であった。移転計画は確定し、現在進行中である。

専修大学社会科学研究所の1995年3月の中国企業視察（北京・天津・上海－麻島昭一団長、高橋祐吉秘書長）に顧問として参加した後、私は、「首鋼総公司を訪ねて－『承包制』をめぐる政治的・経済的問題点」と題する小論を、社研の『月報』386号（1995年8月）に発表した。当時、首鋼総公司は、26万2000人の従業員と、157の大規模・中規模の工場を擁し広範な事業を国内的・国際的に展開中であった。視察団の帰国直後の95年7月には、山東省発州市での製鉄所建設の中止、首鋼の周冠五会長（鄧小平氏と親しかった）の突然の退任と同氏の子息の周北方氏の香港での経済犯罪容疑での逮捕などの大きな変化が報道された（『日本経済新聞』1995年7月2日付）。

また、同年4月15日の日本現代中国学会研究会（於東京大学）では、李捷生氏（2005年現在大阪市立大学大学院創造都市研究科助教授）の首鋼の事例に力点をおいた「経営請負制の展開と労使関係」と題する詳細な報告があり、多くを学び参照することができた。奇縁であるが、李捷生氏の母堂は、私と旧知であり、李氏の力作『中国「国有企業」の経営と労使関係－鉄鋼産業の事例（1950年代～90年代）』（御茶の水書房、2000年2月）は、名著としてすでに定評がある。その首鋼について、牛主任の先進的提案があったことを知り、私もうれしいことであった。ちなみに2004年の中国の粗鋼生産高は約2億7000トンで世界最高である。かつて米国が世界一、やがて日本が世界一であったが、いずれも1億トン強の水準であった。官営八幡製鉄所以来、日本では「銑は国家なり」とさえ言われ、韓国では「鉄は国力なり」（朴正熙大統領）とされてきたことを想起すれば、感慨無量である（儀我『転換期の日本企業』同文館、1982年参照）。山崎豊子『大地の子』は、中国の製鉄業界の変動と日中関係の変化を物語る側面からも、あらためて重視したい力作である。

北京の歴史的変遷と胡同・四合院の変貌

北京の歴史的変遷を、胡同中心に概観しよう。「北京市、とくにかつての内城の特色は胡同にある。胡同は元王朝にはじまる。……フートンはモンゴル語で、井戸を指すという。……〔元の〕『大都』の胡同名については、二十九しか記されていない。城壁の内側には人影のない区域が、かなりあった。

『大都』をうけついで明王朝が、〔人口増加のため〕外城に着工した嘉靖三十二年、一五五三

年には、街巷は七百十一条、胡同は四百五十九条にたっていた。

清朝は北京に入城するとすぐ、思い切った住み分けを実施した。内城は満州族人、および従属した漢人の旗人、蒙古人の旗人だけが住むこととし、それまでの住民をすべて追い払ったのである。そこで住民の多くは外城に流れこみ、……新しい街巷とか胡同とかができた。これらすべてを合計すると、二千七十七条にたった。〔住み分けの実施は〕、北京城内の独特の風情をつくることになった。旗人は支配階級として武術に専念するものとされ、商業に従事できなかったから、内城には、商店がなかった。料理屋、芝居小屋などもなかった。それで、内城は閑静な住宅地域となった。いまでも、その雰囲気は残っている。……胡同らしい情緒が感じられるのはやはり内城の東城区あたりであろう。モンゴルの定めた当時の規劃で、胡同が残っている」(竹内実『中国 歴史の旅』前出、326-329 ページ、〔 〕内と傍点は儀我)。

2005年3月3日、専修大学生田校舎で、李国慶氏の「北京のコミュニティ類型と近隣関係の特質」と題する報告をきく機会を得たことは、まことに幸いであった。「新北京、新オリンピック」を目指す都市再開発推進のなかで、伝統的な住居＝平屋の四合院の多くが取り壊され、内城の30地区を含む40地区が歴史文化保護地域として指定されたのみで、近代的な高層建築主流という北京の変貌がまず指摘された。

李氏は、北京のコミュニティを、①伝統的な四合院によって構成される街道コミュニティ、②単位コミュニティ、③商品楼コミュニティ(1990年代以降に発展)の3類型に分類し、その相互関係の歴史的变化を丹念に追求し、3類型の変化にともなう近隣関係の変化に注目している。研究の基本的な視点は、地域住民の階層分化である。

北京の人口は、1949年に204万人、58年に500万人、2000年の常住人口は1382万人、そのうち304万人が流動人口であるが、階層分化と空間配置の変動・居住地の移動が同時進行中である。なお、北京の面積と人口数については、表1のように、「北京市」の都市概念の相異によって範囲が異なることに留意する必要がある。中国の都市政策を3期に分け、第1期(1949-57年)は自然成長に任せていた時期、第2期(1958-82年)、とくに1962年以後は、農村から都市への流入を厳しく制限した時期、第3期(1983年以後)は10万前後以下の小都市への流入を許した時期とする見解(1996年当時)も見られる。「一人っ子」政策、「戸籍制度」の動向とあわせて検討すべきところである(岡部達味・安藤正士編『原典中国現代史』別巻、岩波書店、1996年、130ページ以下参照)。

「戸籍制度」の問題点については、儀我「21世紀の中国経済研究の諸側面」(『専修大学社会科学研究所月報』、457・458合併号)、また「一人っ子」政策については、儀我「中国の少数民族問題の諸側面」(同『月報』482号)を参照していただきたい。

表1 北京市の相異なる都市概念とその面積および人口数（1990年）

相異なる都市概念	面積 (km ²)	人口 (万人)
1. 北京城	62	195
2. 北京城区	87.1	261
3. 北京都市計画区	750	610
4. 北京市街と近郊区	1,369.9	657*
5. 北京市街と近遠郊区	4,567.9	761
6. 北京市行政区	16,567.7	1,104

[出所] 胡兆量「開放政策下の北京——突破、規模と挑戦——」未公開論文。

[原注] 北京市統計局編『1991年北京統計年鑑』、北京、中国統計出版社、1991年。

人口は常住人口の農業人口と非農業人口および暫住人口を含む。

*657万人のうち、常住人口の非農業人口は539万人。

(出所) 岡部・安藤編『原典中国現代史』別巻、131ページ。

後述の歴史的变化を経て、1966年の文化大革命開始以降、住宅の所有権は公有制に変わり、四合院は、多くの家族が混住する「大雑院」に変化した。

3月16日に現地を視察した東城区交道口街道の菊兒胡同の高層四合院についても、李氏はあらかじめ、菊兒胡同に住んでいた陳石氏と王方偉氏の波瀾に満ちた体験談を含めて詳しく解説されたので、参観当日、大いに参考になった。

北京の四合院の家主が、1945年と48年に大きく交替した経緯も興味深かった。1945年は、日本軍の敗戦により日本人が日本に引き揚げ、国民党が日本人の残した四合院を低価格で販売した。

1948年、北京解放直前に、国民党の高級官僚が北京から台湾に移った時、四合院の家主は、また大きく変った。

1956年から、個人の賃貸住宅経営が廃止され、国家による賃貸住宅経営が始まり、多数家族の混住の「大雑院」が見られるようになった。

1966年からの「文革」の10年間には、四合院の多くの持ち主が追出され、「大雑院」化がさらに進行した。1976年の唐山大地震が四合院の構造に及ぼした影響も大きい。

さて、2005年3月14日の報告「北京『胡同・四合院』におけるコミュニティリノベーション」(大矢根淳助教授)において、「劇的な生活の変容を余儀なくされる人々」を、「災害社会学」の基本的視点とする内容に、深く感銘した。私は、最近、医療と製薬企業と薬害の諸関係について、産業公害とも比較しながら、被害者・犠牲者の視点で全体の構造を追求することを心がけているからである。今後も「被災者・被害者社会学」の一端を担いたいと念願している。李国慶・大矢根淳両氏のすぐれた報告から学び得たことは、絶大といってよい。

3月16日、北京宣武区椿樹街道椿樹園「社区」を参観したさいにも、近代的高層建築の建物相互間の格差と、入居者間の格差などに関心をもたざるを得なかった。さらに、新しい高層住宅入居のための「差額」を支払うことができず、遠方への移転を余儀なくされた人々の状況に

についても推察せざるを得なかった。李国慶氏は、3月3日の報告のなかで、「改革開放以後、様々な職業に従事する都市住民の所得格差が拡大する一方、過去の相対的平等から不平等な状況への移行期にある。……もっとも目にみえる形で表象されるものが都市住宅の空間配置である」と指摘している。われわれは、その北京での実情を見聞できたのである。

ちなみに、コミュニティ・Community の日本語への直訳は、共同社会、共同体、地域社会などであるが、現在の中国では「社区」とされている。なお、かつての人民公社は、Peoples' commune と英訳され、1871年の Paris commune は、巴黎公社と中国語に訳されるので、多角的な歴史的文脈の検討も必要であり有益であろう。

念のため、commune の訳語を見れば、コミュニオン（フランス・ベルギー・イタリアなどの最小行政区である市町村自治体）、地方自治体、生活共同体などとされ、ラテン語「公共の」の意とされる。Communism は、共産主義、ラテン語「共有の」の意とされる。また、communal には、共同の、共有の、共用の、などの訳語があり、communalism は、地方自治主義と訳されている。パリ・コミュニオンの主体は、communist ではなく communalist であったという桂圭男氏の説なども想起したい。

その詳細は、長谷川正安・田口富久治・桂圭男・中西啓之・儀我壮一郎「フランス・コミュニオン論と現代地方自治」自治体問題研究所編『地域と自治体』第6集（自治体研究社、1977年）を参照していただきたい。1977年当時は、フランス・イタリア・日本における「革新自治体」の性格と動向が注目される時期であったことも付言し、美濃部都政と石原都政の比較・再検討が必要となる2005年であることと重ね合わせながら、今後、考察を深めたい。

四合院 大雑院と なりにけり
北京でも 隣は何を する人ぞ
高層に 見知らぬ人も 集う春

北京の日本人小学校と南池子28号の四合院

北京の日本人学校に「脱北者」が駆け込むという最近の事件を知るたびに心かたく。

すでに1983・昭和58年に、世界には72校の日本人学校があり、50校を超えた1978年以来、文部省は、世界の4つの地域で校長研修会を開催してきたという。「治安悪く揺れる政情」「登下校……はらはら」という日本人学校の紹介記事があった（『日本経済新聞』1983年3月14日付）。

私は、1926・大正15年4月に1年生として奉天（現・瀋陽）の日本人小学校である奉天尋常高等小学校に入学し、2年生の時に、北京の日本人小学校に転校した。その1927年、張作霖は、安国軍大元帥として北京政府の支配者であった。張作霖の軍事顧問であった父・儀我誠也（当時陸軍歩兵少佐）は、張作霖の南下とともに単身赴任の形で北京入りをしてしたが、奉天から

家族を呼び寄せたのである。

転校して一番困ったのは、日本人小学校で英語（中国語ではない！）を教えていたことである。同級生は、音楽の時間に「トゥィンクル・トゥィンクル・リトル・スター……」などと英語で合唱したりする。ほとんど一緒に転校した須磨君（高名な外交官須磨彌吉郎氏の子息）とふたりで、弱った弱ったとなぐさめあっていたものである。なぜ中国語ではなく英語を教えていたのか。義和団事件のさいの8ヵ国連合軍（英、米、独、仏、ロシア、イタリア、オーストラリア、日本）の出兵（1900年）以来の政治・外交的な歴史的な文脈にもとづくのであろうか。いずれにせよ、私にとっては、短期間だったとはいえ、とんだ災難であった。

しかし、私はまじめに通学した。ひとりで、あるいは林朝子さんという同じ小学生とならんで、南池子28号の儀我公館から、馬車か人力車で通学させられたから、奉天の時のように横道にそれて本屋での立読みなどすることもできない。まさに、「治安悪く揺れる政情」であり、「登下校……はらはら」だった。蒋介石を総司令官とする北伐軍は、日に日に北上を続けていたのである。

北京都心の南池子28号の儀我公館は、堅固な四合院であった。もちろん、入口は1つである。ある日、私は、中国式の「カンシャク玉」を、入口の門の下の石畳に叩きつけて、パンパンとはじけるのを喜びながらひとりで遊んでいた。ひと休みしてから、また1つ投げたら、パンと勢いの良い音がした。ちょうどそこに、父が帰宅し門に入ろうとしていたが、急に顔色を変えて、「馬鹿」と、私を叱りとばした。あまりにはげしい権幕だったので、私も顔色を変えて立ちすくんでしまった。日頃、父は自由放任で私をきびしく叱ったことは一度も無い。せいぜい、「もう少し野菜を喰べたらどうだ」と食事のさいにおだやかに忠告する程度だった。だから、なぜこんなに叱られなければならないのか、わからないままに、心が傷つけられた。あとになって気付いたが、張作霖の軍事顧問だった父は、いつも暗殺を警戒していたのであろう。「カンシャク玉」の音が、ピストルの音にきこえたにちがいない。しかし、小学生の私には、思いも及ばぬことであった。その頃、四合院には、東京裁判でA級戦犯となった土肥原賢二、板垣征四郎その他の日本人と張学良を含む中国要人の出入りも多かったので、当然、「カントリー・リスク」は高い水準であった。現在のイラクにおける米国人の住居ほどではないとしても。

張作霖にとって、戦い利あらず。1928・昭和3年6月3日、北京を出発して奉天へ特別列車で帰還する途中、翌4日の早朝に、関東軍高級参謀河本大作大佐・東宮鉄男大尉などの陰謀によって皇姑屯で列車が爆発され、張作霖は瀕死の重傷を負い、数時間後に自宅で死去したが、その死は、賢明にも、なかなか公表されなかった。同じ車輻に同乗していた父は奇蹟的に軽傷で、早目に奉天に引揚げていた家族と再会できた。77年前の思い出である。

思えば、私は、1929（昭和4）年に中国から帰国し広島済美小学校（後に原爆の爆心地）

に転校したということで「帰国子女」の「先駆」に属するのかもしれない。日本企業の「海外進出」と外国人労働者の来日数の増加という現状のなかで、次の実情が見られ、他人事ではないと痛感しながら今日にいたった。海外に長期滞在する学齢期の日本人の児童・生徒は、1987年には4万1000人に達した。

「トヨタ自動車の企業城下町、愛知県豊田市でも帰国子女の増加は急激だ。豊田市の小中学生の出国者は〔19〕81年度に32人だったが、91年度には221人にハネ上った。これらの子供たちは、3年から4年で戻ってくる。……豊田市では人口33万人のうち、5000人が南米を中心とした外国人だ。『帰国子女より日本語が全く話せない外国籍の子供たちをどう教育するかの方がより深刻』（豊田市の平和小学校校長、成田鉄男氏）との声もある」（『日本経済新聞』1991年11月19日付）。来日した外国人の子弟が、日本で全く就学できないなどの深刻な実情は、2005年5月下旬に、NHKの『クローズアップ現代』（国谷裕子キャスター）で紹介されていた。多くの場合、在外子女は多難である。

2005年6月8日、タイで、サッカー・ワールドカップアジア予選の「日本対北朝鮮」の試合が行われた。結果は「日本2－北朝鮮0」であったが、観客無しという異例の試合である。そのタイに在留する日本人は約3万人で、日本人学校に通学する子女は、約1700人と報道され、その一部は、場外での応援に駆けつけたという。

北朝鮮の核開発・核兵器開発についての6ヵ国協議が約1年間、中断されたままであること、小泉首相の靖国神社参拝が、中国・韓国はじめアジア諸国と日本国内でますますきびしい批判を浴びつつあること、拉致問題は、「先送り」的状況が続いていること、中国に対するODA（政府開発援助）の削減・打ち切りなどを主張する動きが目立ち始めていること、日本企業のアジア諸国への資本輸出は増加傾向を続けていること、「日米共同演習」が「日米共同作戦」の段階に入りつつあること。イラクなどの情勢も予断を許さないこと。これらすべての出来事を通じて、1928・昭和3年の張作霖爆殺事件以後の戦争への道を、2005年現在、対米従属という条件のもとで、ふたたび歩む危険性を、痛感せざるを得ない。「憲法改正」問題も、「普通の国」「戦争する国」を目指す政治的暗流によって左右されるならば、日本の前途は、まさに暗黒である。このような時点に開かれた3月14日と15日の国際シンポジウムの充実した内容は、日中両国間の相互理解と信頼・友好を確認し合う歴史的意義を有する。

北京の夜 平和の星を 仰ぎつつ

乾杯も 平和友好 春北京

(2005年6月9日、記)